

「自分自身で」自他の健康を守ろうとする生徒の育成

— 生徒保健委員会でいう感染症対策 —

I はじめに

社会が急加速度的に変化している現在、私たちは、その対応により、心身に大きなストレスを抱えている。そのような状況においては、自分自身が、心身の健康の保持増進を図るとともに、他者の心身の健康に対しても配慮していくことが、社会全体の健康のために必要不可欠である。そのためにも、生徒が自分や他者の心身の健康を守ることができるような力を育んでいかななくてはならないと考える。しかし、このたびの新型コロナウイルス感染症は、その思いとは裏腹に、心身の健康に大きな影響を及ぼしている。

文部科学省による「新型コロナウイルス感染症の予防」（令和2年4月）では、感染防止対策のねらいとして、「自分の生活や行動を振り返り、感染防止のために、一人一人が気を付けなくてはいけないことを理解し、実践できるようにする」とある。しかし、2020年の6月に休校措置から登校が再開された際、「自他の健康を守るために必要だから、感染症対策を行う」のではなく、「指示されたから、仕方なく感染症対策を行う」といったような、「自分自身で」健康を守ろうとする意識の低い生徒の姿が見られた。また、「感染症対策なんて、学校が行うものでしょう」「学校が空気を清潔にする機械を買って、そこらに置いておいてくださいよ」などと発言する生徒もおり、自分からではなく、大人が何かをしてくれるのを待っている生徒もいた。

そのような本校生徒の現状から、生徒が「自分の生活や行動を振り返り、感染防止のために、一人一人が気を付けなくてはいけないことを理解し、実践できるようにする」ためには、自分でできる感染症対策を行おうとする意識を高めることが大切であると考えた。

そこで、『「自分自身で」自他の健康を守ろうとする生徒』を保健教育で目指す生徒像として設定し、この取り組みを行うことにした。

II 取り組みの概要

1 保健教育で目指す生徒像

「自分自身で」自他の健康を守ろうとする生徒

2 育みたい資質・能力

保健教育で目指す生徒像を達成するために、次のような資質・能力を育んでいく必要があると考えた。

- 健康問題を自分自身の問題としてとらえ、状況に応じた改善策を考える力
- 状況に応じた改善策を実践できる力

健康問題は、生徒の発達段階や医学的研究の成果、社会的状況などによって、その考え得る改善策が変化していく可能性がある。そのため、「状況に応じた改善策」を考えたり実践したりすることは、自他の健康を守ろうとする上で大切であると考えている。

3 資質・能力を育むための手立て

(1) 生徒保健委員会（以下、「保健委員会」）を中心にした生徒主導による働きかけ

保健委員会を中心にした活動を行うことで、保健委員が生徒目線で学校全体やクラスの状況に応じた改善策を考え、実践していくことができると考える。また、保健委員でない生徒にとっても、教員ではなく、自分の立場に近い保健委員による「生徒発信」の活動に参加していくことで、自分自身の問題としてとらえていこうとする意識を高めることにも繋がると考える。

(2) 3つのステップを意識した活動

PDCA サイクルと OODA ループをもとに、「①実態をとらえ、考える」、「②実行する」、「③振り返り、次に繋げる」の3つのステップを考えた。これを意識した活動を行うことで、流れを明確にしながら生徒自身が状況に応じた改善策を考えたり、実践したりすることができると思う。

この3つのステップを進めるために、学校の状況を考慮し、「アンケート調査」や「保健委員による気付き」を踏まえた、「ソーシャルディスタンス強化週間」「手洗い強化週間」「換気プロジェクト」と銘打った3つの活動を行うこととした。

なお、感染症の流行状況により、対面での委員会活動の開催が困難だった時期もあるため、Google の「Google Classroom」を利用したチャットや資料の共有などを併用してこれらの活動を行っていくこととする。

学校の状況	実態をとらえる手段と行った活動内容
令和2年7～9月 休校やオンライン授業から登校が再開したが、委員会活動として集まることは困難だった。	登校再開から間もない時期であったため、全校生徒を対象にしたアンケート調査で実態をとらえた。 →「ソーシャルディスタンス強化週間」
令和2年9月～12月 実施可能な形で学校祭や修学旅行などの行事も行うことになり、その安全な実施の方法について検討を重ねた。	感染症対策が加わった学校生活に、慣れとともに気の緩みが見られはじめたため、保健委員が学級の様子をみて気付いたことから実態をとらえた。 →「手洗い強化週間」
令和3年1月～ たびたび緊急事態宣言が愛知県内に発令される中、「新しい生活様式」を踏まえた学校生活を継続している。	新型コロナウイルス感染症の影響が発生してから約1年が経過し、保健委員がこれまでの経験を踏まえて、今後の実態を予測した。 →「換気プロジェクト」

4 評価について

保健委員の活動の様子や、活動の振り返りアンケートから、資質・能力が育まれたかを評価する。
また、保健委員でない生徒についても、アンケートの結果や保健委員が観察した生徒の様子から、健康問題を自分自身の問題としてとらえることができたかについての評価を行う。

Ⅲ 取り組みの内容

1 「ソーシャルディスタンス強化週間」

ステップ①実態をとらえ、考える

実態をとらえる手段として、休校やオンライン授業から登校が再開されて間もない7月に、全校生徒に対して、保健委員会によるアンケート調査を行った。以下はその質問項目と結果である。

	自分ができているか				クラスできていると思うか				
	できていない	あまりできていない	だいたいできている	できている	できていないと思う	あまりできていないと思う	だいたいできていると思う	できていると思う	分からない
ハンカチやティッシュ、マスク、ゴミ袋などを毎日忘れずに持ってくる	1.3%	3.3%	37.0%	58.4%	1.3%	10.3%	55.4%	24.4%	8.6%
毎朝検温し、健康チェックカードに体温を記入して、学校に持ってくる	0.5%	2.8%	27.2%	69.5%	1.8%	9.1%	60.5%	23.4%	5.3%
密に気を付けて、他の人とソーシャルディスタンスを保ちながら生活すること	8.8%	40.3%	40.6%	10.3%	18.9%	42.6%	27.5%	6.8%	4.3%
感染予防のために、マスクを正しくつけたり、手洗いやうがいをしたりすること	0.3%	2.3%	26.2%	71.3%	0.0%	6.3%	47.4%	42.1%	4.3%
感染予防のために、クラスでしっかり換気ができていると思うか					0.3%	0.8%	19.6%	79.3%	0.0%

なお、この5つの質問については、生徒の関心が高い感染対策を挙げるために、事前に保健委員を対象に行った「感染症を予防するにはどのような対策が必要だと思うか」というアンケートの回答から保健委員自身が抽出している。

このアンケート調査の結果から、ソーシャルディスタンスに関する課題が明らかになった。この課題を解決するため、声を掛ける活動がしたいという声が保健委員から挙がった。その一方で、「注意されても、休憩時間に至近距離で話をしたり、接触のある遊びを続けたりしている人がたくさんいる。そのような人たちに対して、ただ『ソーシャルディスタンスを取ってください』と声を掛けるだけで、本当に効果があるのだろうか」という意見も出た。

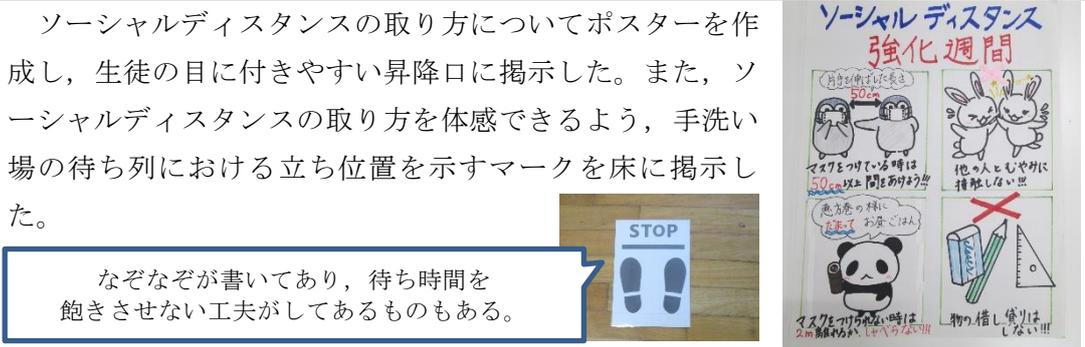
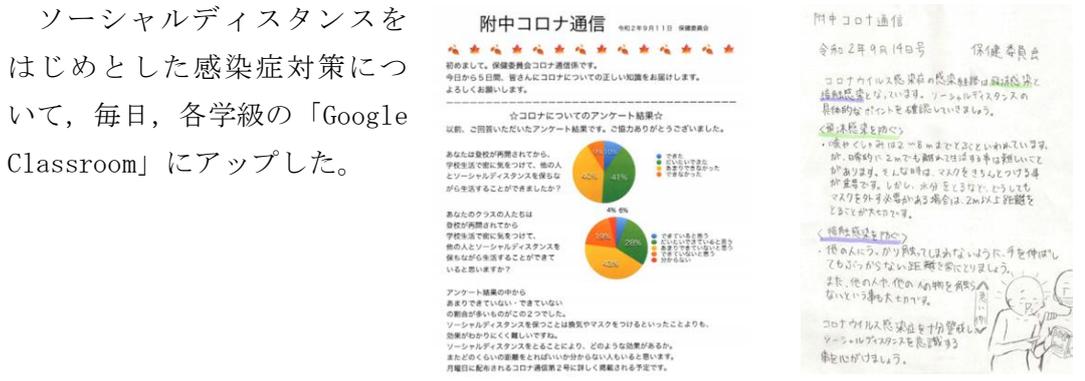
そこで、全校生徒がこの問題をより身近に感じるためにはどうしたらよいか考えるよう保健委員にアドバイスした。その結果、「ソーシャルディスタンスの取り方」の基準を決めて明確化すると

もに、ソーシャルディスタンスをとる必要性を伝え、密を避けるように声を掛ける「ソーシャルディスタンス強化週間」に保健委員が取り組むこととなった。

ステップ②実行する

まず、ソーシャルディスタンスの取り方とその必要性について、正しい情報を得るため、感染症について研究を行っている藤田医科大学の土井洋平教授に代表生徒が質問し、回答いただいた内容をまとめた「ソーシャルディスタンス強化週間のポイント」を、保健委員で共有した。

次に、「ソーシャルディスタンス強化週間」の内容について検討した。令和元年度まで、生徒集会で委員会の活動内容の発表や告知が行われていたが、校内の感染対策で集会を開くことができなくなったため、どのような手段で全校生徒に伝えればよいか話し合った。その結果、啓発動画、ポスターなどの掲示物、保健委員会通信の3つを作成することになり、各係に分かれて準備し、発表した。加えて、強化週間中は、保健委員から密を避けるよう、積極的な声掛けを行った。

<p>啓発動画</p>	<p>テレビを使って昼食中に各教室で放送し、ソーシャルディスタンスの取り方や必要性を伝えた。</p> 
<p>ポスターなどの掲示物</p>	<p>ソーシャルディスタンスの取り方についてポスターを作成し、生徒の目に付きやすい昇降口に掲示した。また、ソーシャルディスタンスの取り方を体感できるよう、手洗い場の待ち列における立ち位置を示すマークを床に掲示した。</p> 
<p>保健委員会通信</p>	<p>ソーシャルディスタンスをはじめとした感染症対策について、毎日、各学級の「Google Classroom」にアップした。</p> 

ステップ③振り返り、次に繋げる

ソーシャルディスタンス強化週間終了後に保健委員会にとってアンケートでは、「クラスのものに呼び掛けることができ、よかった」と、達成感を感じることができた保健委員がいた一方で、「声を掛けにくかった」「強化週間が終わったら元に戻ってしまった」と話し、無力感を感じてしまっている保健委員もいた。

同時に、全校生徒にも、再びステップ①と同様にアンケート調査を行った。結果は以下である。

	前回の結果				今回の結果			
	できていない	あまりできていない	だいたいできている	できている	できていない	あまりできていない	だいたいできている	できている
密に気を付けて、他の人とソーシャルディスタンスを保ちながら生活すること	8.8%	40.3%	40.6%	10.3%	7.3%	40.9%	36.6%	15.2%

「できていない」「あまりできていない」と回答した生徒の割合に大きな変化は見られなかったものの、「だいたいできている」と回答した生徒の割合が減り、「できている」と回答した生徒の割合が10.3%から15.2%に増加している。このことから、「ソーシャルディスタンス強化週間」によって、「だいたい」できていると考えている生徒に対して、意識を高めることができたと考える。

また、このアンケートを取った時期は、社会全体で「気の緩み」が問題として取り上げられていた時期であるが、そのような中で、全体的に大きな変化がなかったことから、生徒の意識を保つことができたとも考えられる。

そのことを保健委員会に伝え、活動の頑張りを認めたところ、先ほどの無力感を感じてしまっていた生徒も含めて、「次はどんなことをみんなに伝えようか」と、意欲をもち始める姿が見られた。

2 「手洗い強化週間」

ステップ①実態をとらえ、考える

9月下旬になり、生徒が、感染症対策が加わった新しい学校生活に対して、慣れとともに、気が緩みはじめているような様子がみられた。また、学校としては、感染症対策をとりながら学校行事を実施できないかと模索する時期にあった。

そのような時期に、実態をとらえる手段として、保健委員に、クラスや学校全体での様子を観察させ、気付いたことを挙げさせた。

その結果、「ソーシャルディスタンス強化週間では、『物の貸し借りをしない』というルールがあったが、学校祭の準備のため、どうしても共有物に触れなければならないのが気になる」という意見が多く挙げられた。また、以前行ったアンケート調査では、手洗いなどの感染症対策について「できている」「だいたいできている」と答えた生徒が多かったが、手洗い場の様子を重点的に観察した保健委員からは、「手のひらしか洗っていないので、洗い残しが気になる」「ハンカチを身につけていないので、手を洗った後、友人からハンカチを借りる人もいた。接触感染を防ぐために手を洗っているのにこれでは意味が無い」という気付きがあり、アンケート調査だけでは見えてこなかった問題点が明らかになった。

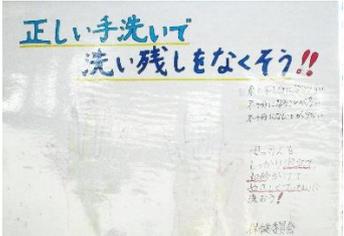
これらのことから、「手洗い」に対して呼び掛けを行いたいという声が保健委員から挙がったため、ソーシャルディスタンス強化週間のときと同様に、生徒がより「身近に」問題をとらえるにはどうしたらよいか、検討させた。すると、「ただ『洗い残しやすい』と言われてるところをネットで調べて伝えるのではなく、保健委員で実際に実験して確かめて、洗い残しやすいところを効果的に洗う方法とともに伝えたい」「ハンカチを持ってきているかチェックして、優秀なクラスを表彰すれば、忘れずに持ってこようという気持ちを高めることができるのではないか」という意見が出された。

そのため、今度は、手洗いで洗い残しやすいところを実験して確かめ、洗い残しやすいところを効果的に洗う方法を伝えたり、ハンカチの所持についてクラスで呼び掛けたりする「手洗い強化週間」を行うことになった。

ステップ②実行する

まず、「手洗いチェッカー」という器具を使い、保健委員が自ら実験して手洗いで洗い残しやすいところを調べ、洗い残しやすいところを効果的に洗う方法を考えて、まとめた。そして、ソーシャルディスタンス強化週間と同様に、このまとめた内容を全校生徒に伝える方法について検討したところ、啓発動画、ポスター、保健委員会通信を作成することになり、各係に分かれて準備を行った。

加えて、各クラスの一週間のハンカチの所持率を調べ、優秀なクラスを表彰する「ハンカチキャンペーン」を開催し、ハンカチを持ち歩くように呼び掛けを行った。

<p>啓発動画</p>	<p>テレビを使って昼食中に各教室で放送し、保健委員が実験で確かめた、手洗いで洗い残しやすいところや、洗い残しやすいところを効果的に洗う方法を伝えた。</p> 
<p>ポスター</p>	<p>手洗いで洗い残しやすいところを伝えたり、こまめな手洗いを促したりするポスターを作成し、教室や手洗い場付近に掲示した。</p> 
<p>保健委員会通信</p>	<p>効果的な手洗いの方法などについてまとめたり、ハンカチの所持について呼び掛けたりする保健委員会通信を、各学級の「Google Classroom」にアップした。</p> 

ステップ③振り返り、次に繋げる

手洗い強化週間で、保健委員は、「自分たちが実験をすることで、手洗いについて分かりやすく伝えることができたと思う」「動画を話題にして手洗いをしている人がいて嬉しかった」という感想もっていた。また、「ハンカチキャンペーン」を通してほとんどのクラスにおいてハンカチの所持率が上昇したことから、保健委員の手洗いについての呼び掛けが全校生徒にある程度伝わり、行動を変えることが結果として現れたと考えられる。

一方で、「手洗い場が小さく、密になってしまうので、手洗いがしにくい」という声も挙がった。これには、1学年160人程度いるフロアに、手洗い場の蛇口が4つしかないという施設の問題があり、その状況で、手の清潔を保つという感染対策をどのように行うかが次の課題となった。

そのような中、ある保健委員から、「各教室に手指消毒用アルコールを設置してはどうか」という意見が出た。そのときすでに各学年のフロアの廊下に2つずつ手指消毒用アルコールが設置されていたが、それを各教室に拡充しようとするものである。県内でも感染者が増加していた時期でもあり、「感染対策を強化したい」という強い思いからの発言であった。

しかし、それに対して、別の保健委員からは、「感染対策のためには設置した方がいいと思うが、廊下に設置してある手指消毒用アルコールの使い方を見ていると、教室に設置することに不安がある」という意見が出された。

そこで、どのようなルールを守ることができれば設置ができるか考えるようアドバイスした。話し合いの結果、「自分の手の消毒以外には使わない」「1人1回につき、ワンプッシュのみの使用とする」といったルールを決め、それを守ってもらうことで手指消毒用アルコールの設置をしていくことになった。

ルールは保健委員から全校生徒に伝えるとともに、手指消毒用アルコールのボトルに、ルールを知らせる手作りの看板を取り付けることで、ルールを周知徹底できるようにし、各クラスに手指消毒用アルコールを設置することができた。【写真1】



【写真1】

3 「換気プロジェクト」

ステップ①実態をとらえ、考える

新型コロナウイルス感染症が社会に影響を及ぼし始めてから1年近くが経った1月頃、保健委員から、「今の実態をとらえて活動を行うのも大切だが、今後問題になることを予測することで、この先に向けた活動を行いたい」という意見が出された。そのため、これまでの、感染症対策が加わった新しい学校生活の経験から、今後の実態を予測させた。

その結果、「常時、窓とドアの一部を開けているため、夏はエアコンが効きにくく、過ごしづらさを感じた。冬は教室内での防寒着の着用が認められているが、一層寒さが厳しくなることを考えると、換気についての意識が下がってしまうのではないか」「手洗いは『手洗いチェッカー』を使って、効果を分かりやすく伝えることができたが、換気の効果は分かりにくいので、換気についての意識が下がってしまうのではないか」など、換気への意識の低下を心配する声が多く挙がった。

このことから、感染症対策として常時換気を継続した上で、換気についての意識を高めるための活動を行うことになった。これまでのように、生徒がより「身近に」問題をとらえるにはどうしたらよいかという視点で保健委員に検討させたところ、「せめて心だけでも温かくなるように、『心温まる話』を募集し、発表することで、換気することに前向きになれるのではないか」「換気の効果を実感的に分かりやすく示すことで、意識を高めることができるのではないか」という意見が出された。

そこで、「心温まる話」の募集と、換気の効果を実感的に示すことで、換気についての意識を高める「換気プロジェクト」を行うことになった。

ステップ②実行する

「心温まる話」については、全校生徒に、換気の大切さを踏まえた上で、換気を行うことによって室温が低下しがちな中でも、せめて心だけでも温かくしたいという活動の趣旨を伝えた。そして、集まった「心温まる話」を保健委員が読み上げたものを録音し、昼食の時間に放送した。

換気の実感を分かりやすく示すことについては、二酸化炭素濃度測定器を活用した。まず、エアコンを使用しておらず、ドアや窓をほぼ全開にして十分に換気をしている時期に、保健委員が各学級で2日間にわたり、きちんと換気ができているときの二酸化炭素濃度について1時間ごとに計測と記録を行った。【写真2】その結果から、十分に換気ができていると考えられるときの二酸化炭素

濃度を踏まえて、学級ごとに、「換気の目安」を保健委員が設定した。「換気の目安」とは、この数値を大きく超えたときに、集中的に換気を行うための目安となる二酸化炭素濃度である。この「換気の目安」を記入した看板を、二酸化炭素濃度測定器に設置することで、保健委員や他の生徒が、換気の必要性やその効果を視覚的に把握することができるようになった。【写真3】

	5月12日(水)			5月13日(木)		
	CO ₂ 濃度	温度・湿度	窓(O・×)	CO ₂ 濃度	温度・湿度	窓(O・×)
登校時	467 ppm	24.3℃ 39%	○	507 ppm	24.3℃ 40%	○
朝活の後	641 ppm	24.3℃ 41%	○	521 ppm	24.6℃ 46%	○
1限放課	545 ppm	24.8℃ 42%	○	555 ppm	25.6℃ 45%	○
2限放課	471 ppm	25.5℃ 40%	○	593 ppm	27.3℃ 42%	○
昼食時	510 ppm	25.5℃ 39%	○	531 ppm	27.3℃ 42%	○
昼休憩	487 ppm	25.4℃ 39%	○	545 ppm	27.4℃ 43%	○
4限放課	530 ppm	24.3℃ 40%	○	516 ppm	28.8℃ 43%	○
5限放課	560 ppm	25.4℃ 40%	○			
短活後	570 ppm	25.5℃ 41%	○	480 ppm	28.8℃ 43%	○

【写真2】



【写真3】

ステップ③振り返り、次に繋げる

保健委員は、活動を通して、「教室は寒いけれど、『心温まる話、よかったね』と話している人がいたので、少しでも前向きに過ごすことができたと思う」「保健委員ではない生徒も、二酸化炭素濃度を気にしていた」「エアコンを使用したときには、ドアや窓の一部を開けて換気することになるが、その時に注意深く見ていきたい」という感想をもっていた。このことから、生徒が換気について前向きにとらえることができ、意識を高めることにつながったと考えられる。

加えて、「今は昼食の時間に談笑することもできないので、心温まる話を流すことができて良かったと思う」「感染症対策で今までやれたことに制限がかかり、ストレスがたまっている人も多いので、心の健康についても取り組みたい」「夏には、換気と熱中症対策の両立ができるように、熱中症の予防についても取り組みたい」などと話し、実態を予測することから始まった「換気プロジェクト」から、さらにその後の活動について、繋げて考える保健委員もいた。

4 取り組みの成果と課題

保健委員の活動の様子から、健康問題を自分自身の問題としてとらえ、状況に応じた改善策を考えたり、実践したりすることができた。しかし、結果が分かりにくかったり、他の生徒の「意識」や「行動」を変える難しさに直面したりして、悩む保健委員もいた。そのため、積極的に取り組み、頑張る保健委員が無力感を感じることをしないよう、成果が分かりやすい活動を組み合わせたり、声かけなどのサポートを行ったりしていく大切さを感じた。

また、保健委員ではない生徒についても、アンケートの結果や保健委員が観察した生徒の様子から、健康問題を自分自身の問題としてとらえようとする意識が高まっているのを感じた。今後は、保健委員でない生徒に対し、健康問題を自分自身の問題としてとらえ、状況に応じた改善策を考えたり、実践したりすることができるよう働きかけていきたい。

IV まとめ

新型コロナウイルス感染症については、継続的な感染症対策が求められているが、学校ならではの心や身体の問題や、今後、状況によって、新たに発生する問題があると考えられる。また、将来、同じように大きな健康問題が発生したときに、今回の経験をいかし、適切に対処していくことは大切であると感じる。

そのため、今回の新型コロナウイルス感染症の問題を、「その場限り」ではなく、「将来にもいかなることのできる学びの機会」としてとらえる視点をもちたいと考えている。

これからも、保健委員会による生徒発信の活動を通して、将来にわたって、「自分自身で」自他の健康を守ろうとする生徒の意識を高めていきたい。